

# ヘレニズム復興の大衆化と古典神話を扱う詩人

## —*Flora Domestica* と ‘On a Leander Gem which Miss Reynolds, my Kind Friend, Gave Me’ の検証—

金 澤 良 子

### 序

古典神話を題材にした John Keats の作品は、彼自身の古代ギリシアへの強い憧憬を示唆するのみならず、18 世紀後半から 19 世紀にかけてのイギリスにおけるヘレニズム復興がいかに大衆規模で浸透していたかをよく表している。キーツの作品の中でも、オリンポス神族とタイタン神族の争いを元にした ‘Hyperion: A Fragment’ の冒頭の詩行は、当時の書評においてある程度の高評価を与えられていた。だが、初めてギリシア神話に挑んだ長編物語詩 *Endymion* や、その他多くの古典神話を題材にした彼の詩は批判の対象にはなっても、賞賛されることは極めて稀であった。キーツの古典神話への取り組みが評価されるのは、彼の死後のことである。友人で画家の Joseph Severn は、キーツの死後から 40 年後、次のように述べている。

altho he knew no Greek and could only get at the greek legends thro translations, yet he penetrated deeper into it and realized a modern arcadian world, such as no greek scholars of modern time had done and such forms the ground work of poetry at the present time, for Keats’ s poetry has been an impulse to an entire new school . . . a mine of inexhaustible wealth wherein the modern poets may delve without limit, without exhaustion.<sup>1</sup>

キーツの師でもある Leigh Hunt を中心とするメンバーから構成された、いわゆるハントサークルの面々も、古典神話を題材にした作品を数多く残している。その中でも、ハントは、パブリックスクールや大学等で、古典教育を受けていない、新興の中産階級読者にとって、より身近な古典神話世界を提示することに成功したといえる。ハントの ‘Bacchus and Ariadne’ は、1819 年出版の *The Poetical Works of Leigh Hunt* の中に収められている 360 行あまりの詩である。またこの詩は、同年出版され、さらに翌年には第二版も出版されることとなる *Hero and Leander and Bacchus and Ariadne*

にも収録されている。本稿では、古典神話を題材にしたハントの作品と、彼が携わった *Flora Domestica*、さらにはキーツのソネット ‘On a Leander Gem which Miss Reynolds, my Kind Friend, Gave Me’ をそれぞれ検証し、これらの作品が共通した背景として持つ、大衆に広まり行くヘレニズム復興の一側面と、そうした風潮に対する両詩人の姿勢と古典神話を題材にする作品の果たす役割を考察していきたい。

## 1. 「バッカスとアリアドネー」と『フローラ・ドメスティカ』

まず、ハントは「バッカスとアリアドネー」で「あらゆる甘美なもの」(“all sweet things”)として以下のものを列挙している。

These, when they issue from the unclouded seas  
Preside o’er all sweet things; all luxuries  
That come from odorous gardens; all the bowers  
That lovers sit in, and the princely flowers  
Attired the brightest; all the cordial graces  
Waiting on kind intentions and frank faces;  
Nay, even the true and better taste in dress,  
The easy wear of inward gracefulness.  
Beneath this star, this star, where’er she be,  
Sits the accomplishd female womanly:  
Part of its light is round about her hair;  
And should her gentle cheek be wet with care,  
The tears shall be kissed off, as Ariadne’s were. (354-66) <sup>2</sup>

この「あらゆる甘美なもの」には、ハントの美意識がよく見て取れる。ここに出てくる、「薫り高き庭」や、「最も美しい花の咲くあずまや」、「思いやりのある優美さ」といったものにはみな、自然界にそのまま存在するものではなく、人間の洗練された感覚により意図的に作られた美しさを持つという共通点がある。中でも、「庭」と「最も美しい花の咲くあずまや」に関していえば、ハントは、*The Literary Pocket-Book* で 1819 年に最初に発表した「自然の暦」(‘Calendar of Nature’) (5-40) の中で、郊外に住み、庭園の魅力を味わうことに関し、以下のように提案している。“if ever money is well spent upon luxury, it is upon such as draws us on to love the cheap kindness of nature.” <sup>3</sup> 正式名を *The Literary Pocket-Book; or, Companion for the Lover of Nature and Art* とする *The Literary Pocket-Book* は、1819 年から 1822 年の間、年に一回ずつ刊行され、本屋や書籍商で販売された。London だけでなく、Oxford や Cambridge, Edinburgh といった町でも目にすることが出来た。この年鑑の目的は、

“cultivate the middle-class taste for literature in an accessible and democratic form”であった。<sup>4</sup> また、売り上げも非常に良く、5 シリングという値段は、*London Magazine* や、*Blackwood’s Edinburgh Magazine* でも推薦されるほどであった。この年鑑に掲載された「自然の暦」は、非常に人気を博したため、二年後には、*The Months: Descriptive of the Successive Beauties of the Year* という一冊の書籍の形で出版となる。この本でハントが述べるのは、いかに多額の費用をかけずに、自然を愛する方法を身につけるかである。すなわち、花や木々を自ら植えることで、小さな土地しか持たない郊外居住者でも、田舎の私有地に巨大な公園や庭園を持つ上流階級の人々が味わうのと同じ、自然の生い茂る緑を膨大な費用をかけずに、堪能できるとしている。ハントが「バッカスとアリアドネー」で「あらゆる甘美なもの」として挙げた「薫り高き庭」や、「最も美しい花の咲くあずまや」は、こうした彼の思想が結晶化したものであるといえる。さらに、ハントは、園芸と詩を効果的に結び付けている。そして、この両者を結び付けるものこそが、ハントおよびキーツが傾倒していた古典神話に他ならない。

ハントの義理の妹である Elizabeth Kent は、1823 年 *Flora Domestica, or, the Portable Flower-Garden: With Directions for the Treatment of Plants in Pots* <sup>5</sup> という書物を出版しているが、この本は 1831 年に新版として出版されることとなる。<sup>6</sup> この新版では、1825 年 6 月 5 日付けで、序文に 9 ページ分、加筆が行われている。ここでは、主語が、それまでの序文中で統一されていた“I”ではなく、“we”という形に変化しており、ここには明らかにハントの参加がうかがわれる。Nicholas Roe は初版の出版前の 1822 年 3 月のポート上でのハントの様子について触れ、“He [Hunt] was also drafting passages that would help Bess with *Flora Domestica*, her encyclopedia of plants for suburban gardens”と述べ、ハントの積極的な協力を示している。<sup>7</sup>

『フローラ・ドメスティカ』では、アルファベット順に並んだ植物の目次に沿い、本文では、それぞれの植物の語源や、フランスやイタリア語での呼称、植物の特性や植生、効能や種類、また水のやり方や環境、適切な栽培方法等が説明されている。目次に並ぶ古典神話中の人物の名前や、引用される多くの詩、および花の起源を説明した古典神話の解説は、さながらこの園芸本に、古典神話のアンソロジーといった趣を与えている。またそれぞれの植物に関連した詩が引用されているのも特徴的である。たとえば、バジルの項では、キーツの‘Isabella’の詩が二連、マリーゴールドの項では、‘I stood tip-toe upon a little hill’の一節(47-56)が引用されているが、詩行とキーツという姓のみが記され、詩のタイトルまでは明らかにされていない。また、野バラや水仙の項では、『エンディミオン』がページ数とともに引用されている。

また、『フローラ・ドメスティカ』の序文には「バッカスとアリアドネー」でハントが示した思想が、そのまま受け継がれているように思える。エリザベスは、序文で、鉢植えの花をいかにして長持ちさせ、枯れないようにするかという、この本の執筆の契機を述べているが、この一節は、*The Months* での、庭付きの邸宅を持つ余裕がなければ、「鉢植えの花」(“portable garden”)を買えばよいと勧めるハントの思想と一致する。また、ハントが「自然の暦」で言及した箇所が引用されているとこ

ろも多々ある。さらには、*The Indicator*を脚注に載せハントの言葉を引用している箇所も見られる。また、ギンバイカの項では、Thomas Moore の *Lalla Rookh*, Vergil の *Georgics*, Edmund Spenser の *The Faerie Queene* の引用の後に、ハントの *The Story of Rimini* や *The Descent of Liberty, A Mask*, さらに *Foliage* からの Theocritus 訳、キーツの ‘Sleep and Poetry’, ハントの Catullus 訳からの詩の引用が入り、Michael Drayton の ‘The Muses’ Elysium’ の引用で終わっているように、ハントの詩が、偉大な詩人たちの詩の引用と並べられている。ここには、協力者であるハントの明白な介入が垣間見えるとともに、詩人としての名声獲得に燃えるハントの姿もうかがえる。『フローラ・ドメスティカ』におけるハントの思想の影響の大きさは尋常ではなかったといえる。

また、中でも、キーツの詩が、タイトルとページ数とともに特に多く引用されているのも、彼を擁護する立場にあったハントの意図を感じずにはおれない。巻末には Taylor and Hessey 社の既刊作品のタイトルが価格とともにリストアップされている。キーツの詩集も、『エンディミオン』はリストの 19 番目に、1820 年詩集は 20 番目に掲載されている。多くの詩行を掲載した『フローラ・ドメスティカ』は、園芸に興味を持つ読者層に既刊の詩集を効果的に宣伝する役割を大いに担っていたことになる。

さらにエリザベスは、この序文で、“The love of flowers is a sentiment common alike to the great and to the little ; to the old and to the young ; to the learned and the ignorant, the illustrious and the obscure” とし、Francis Bacon や、イングランドの政治家 William Cecil Burleigh, イタリアの詩人 Ludovico Ariosto らもみな、庭で花を育てるといふ娯楽に心を注いでいたと述べている。<sup>8</sup> そして、庭仕事にまつわるアリオストの息子が残した逸話を引用し、“Was a cruel, unfeeling, or selfish man ever known to take pleasure in working in his own garden?” と述べている。<sup>9</sup> また、“This love of nature in detail (if the expression may be allowed) is an union of affection, good taste, and natural piety” という言葉も残している。<sup>10</sup> この “affection” や “good taste” は、ハントが「バッカスとアリアドネー」で称えた “inward gracefulness” や “better taste” に意味上、相当するものである。

エリザベスはこの後も、数々の著名人と庭に関する話題を取り上げている。英国の詩人 William Cowper, イングランドの日記作家 John Evelyn, 詩人で随筆家の Abraham Cowley, スイスの牧歌詩人で画家の Salomon Gessner らもみな自分の庭で作業をしていたという。また、スコットランドの風刺作家 John Barclay, Alexander Pope, Jean-Jacques Rousseau, Voltaire などの名も挙げている。とはいえ、実際に園芸を、庭付きの自身の邸宅で楽しむ層は限られており、序文の始めで明らかにした、この本の目的であったはずの「鉢植えの花」の推奨と、序文の中盤以降で挙げられる著名人と彼らの庭園のエピソードとの間にはどこか違和感を覚えざるを得ない。

ここにも、エリザベス自身の意図というよりは、やはりハントの意図が垣間見られる。ハントの詩は、“the easy graceful style of familiar narrative” と評された『リミニ物語』のように、保守派から見れば、中産階級的な、庶民的な詩であった。<sup>11</sup> 古典神話を題材に創作した物語詩「バッカスとアリアドネー」の執筆は、教育を受けた上流階級の特権であった古典神話を自らの手のうちに入

れようとする彼の野心の表れである。ハントは、「薫り高き庭」や、「最も美しい花の咲くあずまや」や、「思いやりのある優美さ」に“luxury”を見出し、それらを「甘美なるもの」と呼ぶことで、自らが古典神話を語るにふさわしい感性を十分に持ち合わせている“gentleman”であることを公に宣言していた。同様に、『フローラ・ドメスティカ』の序文にも、名だたる作家や政治家、哲学者と同じように、「自然を愛好する」感性を育みたいと望む、当時の新興の中産階級の上昇志向が顕著に見て取れる。

『フローラ・ドメスティカ』の前身ともいえる「自然の暦」が最初に掲載された年鑑については先に触れたが、この年鑑自体は、“Five shillings cannot well be laid out more advantageously for a Christmas present (to a man, woman, or child), than in the purchase of the Literary Pocket-Book for 1821”と *London Magazine* で推奨されていた。<sup>12</sup> 「自然の暦」を始めとし、この年鑑に掲載された作品の内容が、男性だけでなく、女性や子どもにも理解のし易く、また興味を抱かせるものであったことが窺われる。また、John Wilson は、“we have purchased six copies for new-year’s gifts to six young ladies of our acquaintance”と述べている。<sup>13</sup> そして、ウィルソンが、“the Literary Pocket-Book, though a sort of almanac, is quite dressy-looking with its scarlet coat”と述べていることから、中産階級の女性向けの読み物としても人気があったことが十分推察される。<sup>14</sup>

## 2. 大衆化するヘレニズム復興に対するキーツの不安

新興の中産階級の台頭によるヘレニズム復興の大衆化を示す詩の一つとして、キーツが書いた「親しい友レノルズ嬢がくれたレアンダーのジェムの絵を見て」というソネットが挙げられるだろう。これは、1817年3月に執筆され、キーツの友人の John Hamilton Reynolds の四姉妹の一人の Jane Reynolds から、“one of James Tassie’s ten popular paste reproductions of gems engraved with classical scenes, in this case Leander swimming the Hellespont”, いわゆる James Tassie の宝石の複製である “Tassie’s gem” を贈られたときのことを詠った詩である。<sup>15</sup>

しばしば “Scottish Wedgewood” と呼ばれたタッシーは、1735年 Glasgow に生まれ、石工として働き始めたが、彫刻家としても評判になり、Robert Foulis の絵画のコレクションに影響を受け、芸術家として真剣に学び始める。1763年に Dublin に移り、彫刻家、塑像製作者として腕を磨いた。その後、彼の関心は、古代の宝石の複製に向けられた。彼の製作する複製は、色も材質も正確であったため、本物と複製を持ち主が見分けられなかったほどであった。その後、1766年にロンドンに来てからも、宝石の複製は続けていた。Josiah Wedgewood は、インタリオ（沈み彫り、彫り込み模様）やカメオ（浮き彫りを施した瑪瑙、貝殻など）を最初に製作する際、タッシーの鋳型を用いたという。タッシーは、12,000以上の古代のものや現代式のデザインの宝石を複製した。ラテン語のモットーが書かれたタッシーのギリシアの竖琴がモチーフになった複製をキーツ自身も所有していたことは、1819年3月、妹の Fanny Keats にタッシーの複製を買ってあげようとする内容の手紙で明らかである。<sup>16</sup> そして、この竖琴の複製が、恋人 Fanny Brawne からの、1818年のクリスマスのプレゼントであった。

また、ハントは、タッシーの複製について、その安価な値段と、わずか数日の内に完成する優れた技術を褒め、“Mr. Tassie’s collection of antiques appears to be very extensive. You may have your choices among all the gods and graces of the ancient world, —Jupiters, Apollos, Venuses, the Graces, the Muses, Lyres, Poets, and Philosophers” と述べている。<sup>17</sup> タッシーの複製は、上流階級の人々にも愛好されていた美術品の一つである。したがって、新興の中産階級の人々は、こうしたタッシーの複製を手に入れることで、上流階級の人々の特権を共有する感覚を持っていたのである。

しかし、キーツは、単に複製を所有することで満足する人々に不安を覚えている。ここで、ソネットに戻ってみたい。

Come hither all sweet maidens, soberly,  
Down—looking—aye, and with a chastened light  
Hid in the fringes of your eyelids white,  
And meekly let your fair hands joined be.  
So gentle are ye that ye could not see,  
Untouch’d, a victim of your beauty bright  
Sinking away to his young spirit’s night,  
Sinking bewilder’d ’mid the dreary sea:  
’Tis young Leander toiling to his death.  
Nigh swooning, he doth purse his weary lips  
For Hero’s cheek, and smiles against her smile.  
O horrid dream—see how his body dips  
Dead—heavy—arms and shoulders gleam awhile:  
He’s gone—up bubbles all his amorous breath.  
‘On a Leander Which Miss Reynolds, My Friend Gave Me’<sup>18</sup>

まず、この詩が“all sweet maidens”という呼びかけで始まっていることに注目したい。キーツがこのソネットを発信している相手が、目の前にいるレノルズ姉妹らだけでなく、文字通り「あらゆる美しき女性たち」である可能性を示している。さらに、“So gentle are ye that ye could not see,/ Untouch’d, a victim of your beauty bright”という行では、二人称の実体が曖昧になっている。もちろん、この“ye”は、目の前にいるレノルズ姉妹を指している。だが、レアンダーを示す“a victim of your beauty bright”の“your”は誰を指すのだろうか。もちろん、レアンダーが、愛するヘーローゆえに命を落としたことから、間違いなくヘーローの美しさの犠牲者、すなわちこの“your”はヘーローを指しているといえる。しかし、同時に、この“your beauty bright”が“So gentle are ye that”の節中に含まれている以上、この「輝くばかりの美」には、ヘーローの美だけではなく、目の前に



いるレノルズ姉妹の「輝くばかりの美しさ」、ひいては、ヘーローとレノルズ姉妹両者を含む女性一般という意味をキーツは“your”に包含している可能性が多分にある。詩人はこのソネット冒頭で、レノルズ姉妹のみならず、ジェムの美しさに惹かれる、すべての女性に語りかけているのである。

さらに、“So gentle are ye that ye could not see, / Untouch’d, a victim of your beauty bright”の構文にも注目しその意味を確認したい。ここで用いられている助動詞“could”は、前後の内容と合わせて考えると、過去形ではなく、現在または未来に対する推量と考えられる。なぜなら、詩人は冒頭で、“Come hither all sweet maidens, soberly, / Down—looking—aye, and with a chastened light”と、彼女たちを呼び寄せ、落ち着くよう求めている。“soberly”や“chastened”という言葉からは、このジェムの外見の美しさや精巧さにのみ感心を持つのを止め、そこに描かれたレアンダーの悲しい最期にふさわしい「冷静さ」や「神妙な」態度を取ることを、彼女たちに要求している詩人の姿がうかがえる。そして“meekly let your fair hands joined be”という行では、ジェムの文様となったレアンダーの死を悼む気持ちを彼女らが持つことを望んでいる。したがって“So gentle are ye that ye could not see, / Untouch’d, a victim of your beauty bright”は、「あなた方はあまりにも心優しいのだから、あなた方の輝くばかりの美の犠牲者を心動かされずには見ずにはおれないでしょう」という意味が適切だろう。

すなわち、詩人の呼びかけなくしては、レアンダーの最期の姿に心動かされることのない目の前の女性たちに対し、ジェムの宝飾品としての美しさではなく、そこに描かれた恋人たちの悲劇的な最期に感じ入る心を持つことを、詩人は求めている。行頭に“Untouch’d”を置くことで、レアンダーの悲運に思いを馳せることもなく、嬉々として宝飾品を持つ女性たちの姿が浮かび上がらせている。ソネットの後半は、ヘーローに会うため、嵐の海を泳いで渡って行くレアンダーの姿の描写にのみ費やされており、読者をレアンダーの泳ぐ海へと引き付けていく。

一方、ハントは、レアンダーの死の顛末の描写を、‘Hero and Leander’という物語詩で、より詳細に生き生きと描いている。この詩が書かれたとされる1816年の秋、ハントは経済的な問題を抱えていた。‘Letter of Harry Brown’という書簡体詩と「ヘーローとレアンダー」をそれぞれ出版することを試みたが、テイラーアンドヘッシー社から書簡体詩の出版は断られてしまう。一方、「ヘーローとレアンダー」の草稿は、温かく迎えられ、一時金として20ギニーを事前に受け取ることが出来た。<sup>19</sup> 出版社側には、少なくとも古典神話を扱った恋愛詩が一定の読者を獲得するであろうという算段があったと思われる。古代の宝石の複製である“Tassie’s gems”を所持することに関心のある中産階級層の人々が、古典神話の解説や補足説明の役割を果たす読み物としてキーツやハントの詩を愛好する読者となる可能性は大いにあった。

実際、キーツのこのソネットが、現代の批評において、研究対象になることは極めて少ないが、当時多くの中産階級層の目に触れられていた事実は見逃せない。1829年にA. and W. Galigananiによってパリで出版された*The Poetical Works of Coleridge, Shelley and Keats*の中に収められたこのソネットを最初に出版したのは、同じく1829年の*The Gem: A Literary Annual* (4vols.1829-32)であった。

この文芸誌は、Thomas Hood による編集で、ハントの *Literary Pocket Book* 同様、ロンドンやそれ以外の都市でも、広く販売されていた年鑑で、1829 年の第一号は、出版から一週間で、5,000 部が売れ、引き続き第二版も 2,500 部の売り上げと好調であった。1830 年の序文には、「年鑑で、初年度にこれだけ売れたものは他にない」という文句が記載されている。この年鑑には、60 編ほどの詩と散文に対し、13 枚の図版と、そのリストが、挙げられており、さらに、この図版だけでも、販売できる旨が記載されている。古典神話を題材にしたキーツのソネットが、中産階級読者層を意識したこのような年鑑に掲載されていたことは、大衆化するヘレニズム復興の一端として、古典神話や古典神話の解説的役割を果たす詩もまた、タッシーの複製同様、上流階級の仲間入りを望む中産階級の上昇志向を満たす一商品であったことを示している。

### 3. 古典神話と女性たち

そして、レアンダーの話をレノルズ姉妹に語り聞かせたキーツの姿は、妹ファニーに宛てた書簡の中で形を変えて現れる。

We have been so little together since you have been able to reflect on things that I know not whether you prefer the History of King Pepin to Bunyan's Pilgrims Progress—or Cinderella and her glass slipper to Moor's Almanack. However in a few Letters I hope I shall be able to come at that and adapt my scribblings to your Pleasure. . . Perhaps you might like to know what I am writing about. I will tell you. Many Years ago there was a young handsome Shepherd who fed his flocks on a Mountain's Side called Latmus—he was a very contemplative sort of a Person and lived solitary among the trees and Plains little thinking—that such a beautiful Creature as the Moon was growing mad in Love with him—However so it was; and when he was asleep on the Grass, she used to come down from heaven and admire him excessively for a long time; and at last could not refrain from carrying him away in her arms to the top of that high Mountain Latmus while he was dreaming—but I dare say you read this and all the other beautiful Tales which have come down from the ancient times of that beautiful Greece. If you have not let me know and I will tell you more at large of others quite as delightful. (L i 154)

キーツにとって、ファニーは妹といえ、「物心ついてから、ほとんど一緒に暮らしたことがない」ため、彼女が、「バンヤンの『天路歷程』よりも、ペピン王の歴史が好きか、ムアの暦よりも、シンデレラとガラスの靴が好きかわからない」とあるように、年頃の女性の読書経験に関する情報量としては、彼の周りにいるレノルズ姉妹のような、血のつながらない友人の女性たちとそう変わりはない。エンディミオンについても、妹がどの程度知っているのか判断するすべがないので、一通り、エンディミオンについて、説明をし、その後で、「しかし、この話やその他の美しいギリシアの昔か



ら伝わった話は、本を読んで知っているでしょう。もし、知らなかったら、知らせてください。これと同じくらい愉快な話を詳しくしましょう」(L i 154)と記している。ここにも、古典神話を平易な言葉で分かり易く、愉快に語り、紹介しようというキーツの姿が垣間見える。

また数日後には、レノルズ姉妹に宛てて、以下のようにエンディミオンを引き合いに出している。「あなたが海岸を去られる前に、海の底からエンディミオンを引っ張り出しましょう。もしそれが出来れば、エンディミオンは海岸であなたにご挨拶をして、いろんな冒険をお話して、それが済むとこういつて話を続けましょう」(L i 160)さらに Jane Reynolds には、『エンディミオン』第四巻に登場するインド娘が歌う悲しみの唄も手紙に添えて送ったことを Benjamin Bailey への書簡の中で明らかにしている。キーツが『エンディミオン』の読者として想定していた読者の中には、妹やレノルズ姉妹のような古典教育を受けておらず、キーツのように、英訳された古典神話のアンソロジーを熱心に読んだこともなく、初めてエンディミオンという名を耳にするような女性読者も含まれていたに違いない。

新興の中産階級の需要に答えた美意識を備えた読みやすい詩を生み出していたハントもまた、女性読者を意識し、彼女たちに教養を与える役割を積極的に担っていたといえる。ハントがケント姉妹に出会った最初の頃のエピソードは、このことを如実に物語っている。ハントが丹毒にかかり、彼女たちの家で動けなくなってしまい、家に泊まった際、ハントのベッドのそばで、エリザベスは、彼の好みでない、ポーブ訳のホメロスの朗読をするのである。エリザベスが疲れると、Mary Anne が代わり、彼女の心のこもった朗読はハントの心に響いたのだった。メアリは後にハントの妻となるのだが、これを契機に、ハントはこの姉妹と、スペンサー、James Thomson, William Collins や Thomas Gray らの作品を共に読み、彼女たちの教育的指導者となるのである。キーツが、George Chapman 訳のホメロスを読んで、『イリアス』の価値を再発見したように、キーツが描く古典神話をもとにした物語詩は、身の回りに溢れる園芸や装飾品、また贈呈本といった趣味を通じて、古典神話世界になじんでいた女性たちの既存の古典神話の知識を一層深める側面もあったと思われる。また、エリザベスのように、正規の古典教育を受けていなくとも、自ら語学や、歴史、小説や詩を学んでいた女性もまた少なくなかった。こうした女性たちと、古典教育を受けておらず、自ら、古典世界の知識を身につけ、詩を書いたキーツには共通する感覚もあっただろう。

## 結論

ハントの関わった『フローラ・ドメスティカ』や「バックカスとアリアドネー」の一節は、この時代着実に力をつけていた新興の中産階級層の上昇思考を物語っている。新興の中産階級層の彼らが目指したのは、庭園を持たずとも、自然を愛好する趣味の良さを養うことであり、商業主義に走らず、“inward gracefulness”や“better taste”を身に着けることであった。一方、古典神話の解説的役割を担ったキーツのソネット「親しい友レノルズ嬢がくれたレアンダーのジェムの絵を見て」は、タッシーの高度な技術のおかげで、安価な値段で多くの人が、複製品とはいえ、古代の宝石を手にし、満足

していた当時の人々の風俗を伝えている。同時に、18世紀後半から19世紀にかけて大衆規模で浸透していったヘレニズム復興に対する詩人の立場、すなわち、古典神話をモチーフにした“Tassie’s gem”が一宝飾品としての価値しか持たなくなってしまうことを嘆くと同時に、そうした人々に古典神話の価値を伝える役割をキーツの詩が果たしていく可能性を示している。キーツが生きていた当時、古典神話を素材にした『エンディミオン』やその他の詩は批判の対象になることがほとんどであったが、彼の死後すぐに、購読者の多い年鑑に、先のソネットが掲載されたことは、分かりやすい古典神話の解説の需要の存在とそうした需要に応えるキーツの詩の意義を確かに示している。

## [注]

- 1 Joseph Severn, ‘On the Adversities of Keats’s Fame’, autograph manuscript dated ‘Rome [25 Dec.] 1861’. MS Keats 4. 16. 2, quoted by permission of The Houghton Library, Harvard University.
- 2 本稿のハントの詩の引用は John Strachan ed., *The Selected Writings of Leigh Hunt: Poetical Works, 1801-21*. 5 vols. (London: Pickering and Chatto, 2003) に依る。
- 3 Leigh Hunt, *The Month: Descriptive of the Successive Beauties of the Year* (London: C and J ollier, 1821) 29.
- 4 Mizukoshi Ayumi, *Keats, Hunt and the Aesthetics of Pleasure* (New York: Palgrave, 2001) 34.
- 5 Elizabeth Kent, *Flora Domestica, or, The Portable Flower-Garden; with Directions for the Treatment of Plants in Pots and Illustrations from the Works of the Poets* (London: Taylor and Hessey, 1823)
- 6 *Flora Domestica, or, The Portable Flower-Garden; With Directions for the Treatment of Plants in Pots and Illustrations from the Works of the Poets* (London: Whittaker, Treacher, and co., 1831)
- 7 Nicholas Roe, *John Keats and the Culture of Dissent* (New York: Clarendon Press, 1997) 337.
- 8 Elizabeth Kent, Preface. *Flora Domestica, or, The Portable Flower-Garden; with Directions for the Treatment of Plants in Pots and Illustrations from the Works of the Poets*, 14.
- 9 Ibid., 15.
- 10 15.
- 11 *Eclectic Review* 2<sup>nd</sup> series, V (April 1816) 380.
- 12 *London Magazine* III (January 1821) 66.
- 13 *Blackwood’s Edinburgh Magazine* VI (December 1819) 246-7.
- 14 Ibid., 236.
- 15 Miriam Allot ed., *The Poems of John Keats* (London: Longman, 1970) 107.
- 16 キーツの書簡の引用は, Hyder Edward Rollins ed., *The Letters of John Keats: 1814-21*, 2vols. (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1958) に拠り, 以下第一巻 L i とし, 本文中括弧内に巻数, 頁数とともに記す。L ii 45-6.
- 17 *Indicator* 17 (November 1819) 48.
- 18 本稿のキーツの詩の引用は, Jack Stillinger, ed., *The Poems of John Keats* (Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard UP, 1978) に拠る。
- 19 Roe, 265.